現代中国における家父長制

―中国の主婦論争の読解を通じて―

王嘉若（同志社大学　グローバル・スタディーズ研究科）

主婦は、資本主義にとって重要な存在であった。資本主義の初期には、家に封じ込まれた女性が主婦となり、稼ぎ手となる男性や家族の世話をすると同時に、主婦の消費を通じて資本主義に新しい市場を開拓した。「男性＝稼ぎ手／女性＝主婦」という性別役割分業は、資本主義にとって労働力の効率を最大化できる家族のあり方であると同時に、搾取の方法としても効率的な制度である。また、資本主義の発展とともにやがて女性が労働市場に参与したとしても、安価な非正規労働力に留まる（Mies1996）。一方、女性の社会進出やフェミニズムの台頭により、主婦の性別役割分業が注目されている。日本では、1950 年代から 2000 年代までに６回の主婦論争が起きた。主婦論争に関する研究において、日本女性にとって主婦は一つの規範、あるいは準拠対象であるため、市場労働と家事労働の非対称性が解消しない限り、女性同士の間での論争は続くと指摘されている（妙木 2009）。

他方、中国では、建国以来「女性は天の半分を支えて」という政府が提唱したスローガンにみるように、女性の労働参与は極めて重視され、中国女性の性別規範は主婦ではなく、仕事と家庭内労働を両立できる女性とされてきた。しかし、1980 年代の経済改革後、資本主義導入後の中国では、女性の就労支援や託児や食事提供などの家庭内労働の社会化など、それまで政府から受けていた支援が失われていった。同時に、高齢化問題が深刻化しており、中国政府はケアの責任を全て家庭内部に転嫁し、ケアの担い手としての女性の負担が増えた。つまり、中国の女性は家庭内責任によって労働市場で不利になるばかりでなく、家庭における負担も重くなっている。中国では男女格差が是正されないだけでなく、女性の二重負担が増加傾向にある。そんな中国社会では、社会主義経済期から資本主義が導入された初期まで、主婦はあまり注目されてこなかった。性別役割分担に関して、1980 年代から 2000 年代にかけ、「女性は家に帰るかどうか論争」が数回起こった。男性知識人は、中国国内の雇用機会の不足を女性が家庭に戻るべき理由として挙げてきたが、女性の多くはこれに批判的だった。中国では新自由主義の出現によって家父長制のリバイバルと強化がもたらされ、論争を引き起こしたとの指摘がある(宋 2011)。そして 2010 年代に入ると、「(正規職を持たない)主婦は自律した女性なのか」という女性の間での議論となった。2010 年代以降の議論は、中国において主婦の存在が珍しくなくなってきたこと、主婦に目を向けるようになったことを反映する一方で、現在の中国における主婦研究を含め、主婦の経済力、すなわち主婦が自力でお金を稼ぎ、「自律」能力を身につけるための方法をより中心に議論されるようになっている。

本報告は、日本の主婦論争の研究との比較をもとに、中国で行われている主婦論争を検討するものである。日中の主婦論争を比較すると、準拠対象は異なるものの、問題の核心は女性と生産労働の関係であったことなど共通点がある。いずれの場合も、女性に議論を集中させ、「主婦 vs. 他の女性」という構図が存在する。しかし、主婦は、そもそも誰のため、何のためにに存在するのだろうか。なぜ、これらの議論や研究において、家庭内部における男性の責任が放置・不可視化されている状況に関して扱われていないのか。それは、近代化の過程の中で、性別役割分業と資本主義が新たな組み合わせをとることで、男性が稼ぎ手という既存の性別規範を維持し、その結果、家庭内の責任から免れることができたこととどのような関係があるのだろうか。これらの問題を探るための準備作業として、本報告では主婦論争の中で影響力のある論文、政府文書や記事を文献として研究・分析し、論争時の経済体制や社会構造によって変化する性別規範や性別役割分業を把握した上で、中国における家父長制のあり方を明確化することを目的としている。

【参考文献】

Maria. Mies,1986, Patriarchy and Accumulation on a World Scale. Zed Books.　妙木忍,2009,『女性同士の争いはなぜ起こるのか』青土社。　宋少鵬,2011,「“回家”還是“被回家”？―市場化家庭中“婦女回家”討論与中国意識形態転型」『婦女研究論叢』中国婦女研究会。

（キーワード：主婦論争、性別規範、性別役割分業）